加入国際学術団体に関する調査票

1　国際学術団体活動状況（内規第 11 条　活動報告）

<table>
<tr><td rowspan="3">団体名</td><td>和</td><td>宇宙空間研究委員会（コスパー）</td></tr>
<tr><td>英</td><td>Committee on Space Research（略 称 COSPAR）</td></tr>
<tr><td>団体 HP
（URL）</td><td>https://cosparhq.cnes.fr/
日本学術会議が加盟していることの記載　（有）・　無　）</td></tr>
<tr><td colspan="2">国際学術団体における最近のトピック
（学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等）</td><td>＜学術の進歩＞
近年の宇宙天文学の革新の多くは、2022 年のジェームズ・ウェブ宇宙望遠鏡(JWST)の打上げ・観測に起因している。銀河団の大規模分布、星生成領域の塵ガスの詳細構造、探査機を必要としない太陽系巨大ガス惑星やその衛星群の定量的観測など、様々な宇宙科学分野でハッブル等過去の宇宙望遠に比べて、質・量ともに凌駕した成果を創出し続けている。また、ALMA 望遠鏡に代表される大型地上望遠鏡でも、ダークマターのかすかな揺らぎの検出のように、宇宙論の刷新につながる発見が続いている。
無人探査機による太陽系探査では、日本のはやぶさ 2 と米国のオシリス・レックスによる二つの炭素質小惑星からのサンプルリターンでもたらされた試料の分析から、太陽系内の水と鉱物と有機物の相互作用とそれを可能とした原始太陽系や母天体内部の環境に関する新発見が続いている。世界中の国家・民間が月を目指す中、インドが南極域への着陸探査に、中国が裏側高地からサンプルリターンに、それぞれ世界で初めて成功し、月の科学について飛躍的な成果を生み出すことが期待されている。
小惑星衝突による地球環境並びに人類社会への被害に対応する「プラネタリーディフェンス」は、科学と技術が密接に結びついた応用分野である。特に、衝突危険性がある小天体の内部構造や物性応答に関する科学的知見は、宇宙機による直接探査でこそ得られる。そこで近年、米国の DART 探査機による二重小惑星の衛星への超高速衝突による軌道パラメータ変更実験と、欧州の HERA 探査機による同天体の地形や物性の衝突後変化の調査の準備が、COSPAR 科学小委員会 B1 メンバーを多数含む国際科学チームによって進行中である。2029 年に地球へ最接近する小惑星アポフィスの地上観測と宇宙探査の国際協力も、COSPAR の場で活発に議論されている。

＜当該団体の推進体制の変化＞
役員選挙の結果、ドイツのパスカル・エーレンフロイト（前ドイツ航空宇宙センター議長）が会長に選ばれた。また、事務局長にジャン・クロード・ウオームスが就任した。日本代表（藤本正樹委員）が COSPAR の理事に再任された。

＜国際機関・政府・社会との関わり方＞
総会は、コロナ禍によって半年間延期されたシドニー総会（豪）が、2021 年 2 月にオンライン開催された後、2022 年はアテネ（ギリシャ）、2024 年は釜山（韓国）で開催された。</td></tr>
</table>

	COSPAR は 1957-1958 年にわたって行われた国際地球観測年（IGY）での観測ロケット及び人工衛星による研究を更に協力的に進めるために 1958 年 10 月、ICSU（国際科学会議）により創設された。毎年開催地を移動しながら、冷戦時における東西の宇宙科学関連分野の橋渡しの役割を担っていた。日本での初開催は 1968 年の東京総会である。 1980 年からは、隔年開催に変更され、科学総会をベースとする広い宇宙科学分野の学術団体となった。運営組織は、総会時に加入国代表者による選挙により選ばれる。1998 年には、隔年開催化以降ではアジア太平洋地域で初めてとなる科学総会が、日本（名古屋）で開催され、さらに、中国（2008 年）、インド（2012 年）、オーストラリア（2021 年）、韓国（2024 年）が続いた。宇宙科学の国際化の流れが大きくなってきたことを反映している。 その中で 2014 年のモスクワ総会の年、２月のアブストラクト投稿締切後に、ロシアによるクリミア併合という緊迫した政治情勢となった際にも、関係者の熱意と尽力により、2000 名を超える参加者で総会を成功させている。政治的に困難な時期の国際会議を成功させることで、宇宙科学の国際協力の重要性を周知できた。 2024 年の釜山総会では、ウクライナ情勢に改善が見られない中でも、ロシアの科学者の参加が見られた。世界情勢が分断に向かい、宇宙科学のステークホルダーが政府・民間問わず増えている昨今だからこそ、70 年近く世界中の宇宙科学者間の対話と協力に尽力してきた COSPAR の意義は、益々高まっている。
当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例	「地球気候変動」、「宇宙天気」、「惑星保護」、「プラネタリーディフェンス」、「有人宇宙探査」など。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等	「惑星保護」は、太陽系の科学探査を将来にわたって持続可能にすることと地球生命圏の安全を保持することを目的に、有機物や生命体による汚染が、探査天体および地球・月圏の双方の汚染が太陽系探査で起きないようにするための活動で、全ての太陽系探査計画の往復路双方に制約を与える。例えば、火星着陸機は滅菌処理を徹底し、火星周回機は最後に高度を上げて火星突入を避ける、等である。 これまで COSPAR は、すべての太陽系探査にかかる惑星保護対策のポリシーを制定し、最新の科学成果に基づいて同ポリシーを不断に改訂するとともに、各種探査の惑星保護対策に関するワークショップなどの財政支援を行ってきた。往路については、探査機に含まれる地球物質（バクテリアなどを含む）による探査天体の汚染可能性を議論する。復路が必要なサンプルリターンでは、取得したサンプルによる地球生命圏の汚染の可能性も議論しなければならない。2018 年に惑星保護パネルは各国の宇宙機関代表が参画する形に大幅な改組が行われ、日本からは藤本正樹委員（JAXA 宇宙科学研究所）がメンバーとなっている。 日本のはやぶさ、はやぶさ２小惑星サンプルリターン計画では、日本が提案した惑星保護対策が国際的な専門家によって審査・評価され、COSPAR 惑星保護パネルの承認を得てから打ち上げられ

	た。その後、日本は火星衛星フォボスからのサンプルリターン計画「MMX」を企画し、その惑星保護対策も審査された。火星本体からのサンプルリターンではないものの、MMX がフォボス表面に積もっていた火星物質を持ち帰る可能性があることから慎重な議論が展開された。結果的に、MMX が持ち帰る火星サンプルは十分に殺菌されたものであるという論証が受け入れられ、MMX は適正なミッション規模（火星本体からのサンプルリターンは惑星保護対策が大掛かりなものとなる）で実行できることとなった。 　さらに、月面着陸探査に関する惑星保護基準も改訂された。ここにおいては、民間活動が活発化し、無意味に保守的なルールではなく、より合理的な基準であるべきという考えが背景にあった。現時点での議論の焦点は、太陽系外部にある海洋天体（オーシャン・ワールド）の惑星保護基準をどのように改訂すべきか、である。 「能力開発(Capacity Building)」も、COSPAR の大きな活動となっている。発展途上国を中心に、毎年数回能力開発ワークショップが開催されている。宇宙空間の地上観測だけでなく、近年は超小型衛星を各国が打ち上げる機会が飛躍的に増えてきたことから、COSPAR の様々な科学委員会に関連する能力開発は重要な活動となっている。2024 年には、JWST という米国 NASA が総力を挙げて開発し打ち上げた天文衛星のデータ解析のためのワークショップが、タイで開催された。日本は発展途上国とみなされないため、原則としては日本の学生は参加できないのだが、アジアの近国で開催されたことで、主催者の好意により特別に少人数ではあったが、参加を認められた。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例	藤本正樹委員長は、参加国から 6 名だけ選出される理事を、2018-2026 年の計 8 年の任期で、現在まで務めてきている。JAXA/ISAS 所属の藤本委員長を通じ、日本の宇宙機関が COSPAR の運営に直接関与する現体制の意義は大きい。例えば、国際的な評価も高い「はやぶさ」「はやぶさ２」に続く火星衛星サンプルリターン「MMX」や、将来の外惑星探査ミッションでは COSPAR 惑星保護パネルによる承認が必要であるが、それを日本が主導できる現状は貴重である。 　地球観測分野（科学委員会 A）では、データ利用・共有が大きなテーマとなっており、我が国も大きく関わっている。地球観測衛星に関わる世界的取組 GEO に関するセッション A0.1 が作られている。GEO のデータ利用促進計画のレビューに科学委員会 A の副委員長の新井康平委員（22 期、24 期特任連携会員）が COSPAR 代表として貢献してきた。2022 年からは課題別の小委員会 A1, A3 の委員長も日本人研究者が務めている。 　地球-月システム・惑星・太陽系小天体分野（科学委員会 B）は、太陽系探査の全領域をカバーしている。また同委員会は、宇宙探査パネル、惑星保護パネル、科学委員会 F（宇宙関連生命科学）などと積極的に交流し、学際間合同セッションを企画し、有人宇宙探査、サンプルリターン探査、アストロバイオロジー研究など、近年隆盛した分野を議論する機会を継続的に提供している。矢野

	創委員は課題別小委員会 B（太陽系小天体）の副委員長・委員長を 11 年間務めたのち、2021 年に本委員会の副委員長、2022 年からは同委員長ならびに科学諮問委員、プログラム委員を務めている。現在「2024-2028 年戦略アクションプラン」の元、COSPAR 宇宙探査ロードマップの更新作業を、宇宙探査パネル委員長と共に牽引している。 高層大気分野（科学委員会 C）は、天文学分野とともに、COSPAR で参加者の多い分野である。地上観測や地域的な研究も含むため、参加国の数ではおそらく最大である。科学総会では毎回 700 件程度の講演を集める。中村卓司委員（23-24 期連携会員、25-26 期会員）は本委員会の副委員長・委員長を 16 年にわたり務めており、総会セッションの充実と、分野内外の意志交流を図ってきた。2022 年からは課題別の小委員会 C1, C3 の委員長も日本人研究者が務めている。 そのほか、科学委員会 E、F、科学気球パネル、放射線対パネルでも日本人が委員長や副委員長などの役割を通じて、各分野の学術発展に向けて組織運営に貢献している。 2024年釜山総会は隣国での開催でもあり、総会参加者総数2741人のうち 9 %を 257 人の日本人が占めた。これは全参加国中第三位に当たった。また、國中均宇宙科学研究所所長が世界宇宙機関長円卓会議に招聘され、SLIM の月面ピンポイント着陸や XRISM 衛星の X 線観測の最新画像の成果を紹介し、COSPAR における日本のプレゼンスを大いに発揮した。
当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化	COSPAR の活動を通じて、日本の宇宙科学の成果や今後の計画が広く世界の科学者に伝わる機会が得られている。COSPAR 総会・シンポジウムの招待講演、一般講演や、Space Research Today 誌を通じた報告は、具体的な例である。また COSPAR は、日本で隔年に開催される国際会議 ISTS(International Symposium on Space Technology and Science)のスポンサー団体でもある。 太陽系探査で重要な「惑星保護(Planetary Protection)」の問題では、COSPAR 惑星保護パネルが世界で主導的な役割を果たしている。日本国民を感動させた「はやぶさ」「はやぶさ２」の小惑星サンプルリターンや「SLIM」の月面着陸など、日本の太陽系探査も全て、COSPAR から惑星保護対策に承認を得る形で進められている。特にはやぶさ、はやぶさ２に関しては、COSPAR 承認（お墨付き）がなければ、試料回収場所としてオーストラリアの協力を得ることは困難であった。今後予定されている火星衛星サンプルリターン「MMX」をはじめとする太陽系探査は、国民にも理解しやすく、大きな支持を得ている分野であり、我が国の宇宙科学探査の推進に対する COSPAR の貢献は顕著である。
その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項な	＜若手研究者育成、資金提供＞ COSPAR の科学総会、シンポジウムでは、若手研究者（院生、ポスドク、准教授クラスまで）への参加旅費のサポートを行う制度がある。総会の前年、それぞれのセッションのオーガナイザーは、旅費サポートの寄付を募るためセッションの関連企業・団体のリストアップを求められる。寄付の依頼は COSPAR 本部から行う。参加旅費サポートはオーガナイザーに権限があり、日本の

ど）	若手研究者も選ばれる。COSPAR 総会では、Advances in Space Research 誌に掲載された 31 歳以下の若手研究者による優れた論文に Outstanding Paper Award が表彰される（論文 10 編毎に１編の割合）。 　また COSPAR の事業の中で特に評価が高いものに「能力開発（Capacity Building）ワークショップ」がある。主に宇宙機関や宇宙企業が十分に発達していない国や、宇宙科学に参画する機会に恵まれていない国などにおいて、特定テーマについて講義・実習合わせて 1～2 週間のワークショップを、主に現地の大学院生・若手研究者を対象に開催している。COVID-19 パンデミックを挟みつつ、過去５年間にはケニヤ、ウズベキスタン、中国、タイ、韓国、南アフリカ、チリ、マレーシア、モロッコ、インドで開催され、それらのいくつかに日本人研究者も講師として参画してきた。なお能力開発ワークショップ修了生は「卒業生組織」に属することができ、科学総会等へ参加するためのフェローシップへの応募資格を得るなど、継続的なキャリアパス支援も行われている。 ＜ダイバーシティ育成＞ 　女性研究者の登用については、COSPAR 附則に、推薦委員会が（各国代表者や科学コミッションから出された候補者から）役員の被選挙候補者を絞る時や科学諮問委員会委員を選ぶ時に、留意しなければならないことを明記している。現在、２名の日本人女性科学者が科学小委員会役員として活躍している。 　ただし COSPAR はいまや、特定の性別のみに限定した育成は強調していない。COSPAR は 2021 年に定款を改訂し、「包括性・多様性・公正・アクセシビリティ(Inclusion, Diversity, Equity and Accessibility)」方針を定め、それを監督するコンプライアンス・オフィサーを置いた。また全科学委員会に IDEA リエゾンオフィサーを置き、それぞれの組織・活動において「IDEA」を守り、拡大することが求めている。2024 年からは定常組織として IDEA パネルが創設され、宇宙科学界における IDEA 対策を具体的に議論し、行動することが求められるようになった。 （以下の URL 参照） 　https://cosparhq.cnes.fr/about/cospar-inclusion-diversity-equity-and-accessibility-officer-ico/ ＜科学者の倫理に関する憲章＞ COSPAR は地球規模の科学コミュニティとして、自らを律する「行動規範（Code of Conduct）」を制定している。 （以下の URL 参照） https://cosparhq.cnes.fr/assets/uploads/2023/12/COSPAR_Code-of-Conduct_FINAL.pdf

2　今後の予定について（内規第 11 条　活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）	＜総会＞ 1958 年の COSPAR 創設以来、日本は計二回、それぞれ 1968 年に東京で、1998 年に名古屋で、科学総会をホストしてきた。なお過去に複数回開催した国は、以下の通りである。：６回＝米国；３回＝英国、フランス、ドイツ、オーストリア；２回＝ロシア(旧ソ連)、イタリア、オランダ、ポーランド、カナダ、インド、日本。最近はヨーロッパ、アメリカ、アジアが偏りなく選ばれる傾向があり、初開催国が選ばれる機会も増えている。2022 年ギリシャ（初開催）、2024 年韓国（初開催）、2026 年イタリア（３回目）、2028 年 UAE（初開催）。 アジア圏で二回以上開催した国は、インドと日本のみである。24 期本委員会において、2020 年代に３回目の日本開催が可能かを探ったが、関係各所との検討の結果、断念に至った。 ＜理事会＞ 理事会・科学諮問委員会・プログラム委員会は、総会開催時以外には、毎年３月に COSPAR 事務局に近いパリで開催されるだけである。従って、日本で総会を開催しない限り、理事会の日本での開催予定はない。
日本人の役員立候補等の予定	COSPAR 役員の任期は 2 期 8 年間である。現在は理事会の被選挙権を有する日本代表である藤本委員長が、理事選挙にて選抜され、2018 年以来 2026 年までの２期目を務めている。日本から継続的に理事を輩出するためには、2026 年の理事会改選に備えて、藤本委員長の後継を準備する必要がある。 総勢８名いる各科学委員会委員長も、科学諮問委員、プログラム委員を兼ねており、会長をはじめ役員の選挙権も有する、重要なポジションである。過去には、中村卓司委員が 2012-2020 年に科学委員会 C（上層大気）委員長を務めた。現在、矢野創委員が 2022 年より科学委員会Ｂ（太陽系）委員長の１期目を務めている。今後も引き続き、各科学委員会の役員選挙における日本人委員長選出へ向けた動きが重要である。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き	月ピンポイント着陸に成功した SLIM など、理工学が一体となり、効率的な宇宙科学衛星開発を進めてきたのが日本の強みである。（はやぶさ２のコストは、同様の小惑星サンプルリターンを行った米国の OSIRIS-Rex のおよそ半分）。これを生かして、次期太陽観測衛星等、小型衛星を使った宇宙科学・探査を引き続き推進していく予定である。また超小型宇宙機を活用して、さらなる低コストと短期間での開発を可能とし、より高頻度に宇宙科学を実現するための新しい技術実証ミッションも提言する。一方、火星衛星サンプルリターンや宇宙マイクロ波背景放射偏光観測衛星など、サイズの大きな計画は、国際協力が重要な要素になる。

3　国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条　活動報告）

<table>
<tr><td rowspan="4">総会・理事会・各種委員会等の状況（過去５年間及び今後予定されているもの）</td><td>総会開催状況</td><td>2028 年（予定）（ドバイ・アラブ首長国連邦）
2026 年（予定）（フィレンツェ・イタリア）
2024 年（釜山・韓国）
2022 年（アテネ・ギリシャ）
2021 年（シドニー・オーストラリア(オンライン)）</td></tr>
<tr><td>理事会・役員会等開催状況</td><td>〇理事会は、毎年 3 月に主にパリ及び隔年の総会時に開催される。
2025 年（予定）（ローマ・イタリア）
2024 年（パリ・フランス、釜山・韓国）
2023 年（パリ・フランス）
2022 年（パリ・フランス、アテネ・ギリシャ）
2021 年（オンライン）
2020 年（中止）
〇各国代表者会議は、総会時に開催される。
2028 年（予定）（ドバイ・アラブ首長国連邦）
2026 年（予定）（フィレンツェ・イタリア）
2024 年（釜山・韓国）
2022 年（アテネ・ギリシャ）
2021 年（オンライン）</td></tr>
<tr><td>各種委員会開催状況</td><td>〇科学諮問委員会、プログラム委員会は毎年 3 月に、主にパリで開催。
2025 年（予定）（ローマ・イタリア）
2024 年（パリ・フランス）
2023 年（パリ・フランス）
2022 年（パリ・フランス）
2021 年（オンライン）
〇分野別科学委員会、パネルは総会時に開催される。
2028 年（予定）（ドバイ・アラブ首長国連邦）
2026 年（予定）（フィレンツェ・イタリア）
2024 年（釜山・韓国）
2022 年（アテネ・ギリシャ）
2021 年（シドニー・オーストラリア(オンライン)）</td></tr>
<tr><td>研究集会・会議等開催状況</td><td>〇隔年シンポジウム（特定テーマに絞り、総会がない年に開催される）
2025 年（予定）（キプロス）
2023 年（シンガポール）
〇能力開発（Capacity Building）ワークショップ
2024 年（ケニヤ、ウズベキスタン、中国、タイ）
2023 年（韓国、南アフリカ、チリ）
2022 年（マレーシア、モロッコ）
2020 年（インド）</td></tr>
<tr><td colspan="2">上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定</td><td>＜総会＞
2024 年科学総会（釜山・韓国）、257 人（うち代表派遣 0 名）

＜理事会、各種委員会＞
・理事会、プログラム委員会、科学諮問委員会は、毎年 3 月にパリの COSPAR 本部で開催される。2023 年、2024 年の会議では、理</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td colspan="4">事会１名、プログラム委員会＆科学諮問委員会１名の日本人が参加した。
・各科学委員会、パネルの会議は科学総会の期間中に開催され、事項に記載された COSPAR 役員を務める日本人を含め、関連分野の日本人総会参加者が多数出席している。

＜研究集会＞
・隔年シンポジウムへの日本人参加者は、過去 10 年で毎回平均 15-30 人程度（全参加者の 1 割前後）である。また毎回、日本人数名がプログラム作成に関わっている。
・能力開発ワークショップには毎回、過去 10 年では毎回１～数名の日本人が講師を務めてきた。</td></tr>
<tr><td rowspan="18">国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去５年）</td><td>役職名</td><td>役職就任期間</td><td>氏名</td><td>会員、連携会員の別</td></tr>
<tr><td>理事、
日本代表</td><td>2018～2026</td><td>藤本正樹</td><td></td></tr>
<tr><td>科学委員会 C 委員長、科学諮問委員、プログラム委員</td><td>2012～2020</td><td>中村卓司</td><td>(23-24 期）連携、(25-26 期）第三部会員</td></tr>
<tr><td>科学気球パネル委員長</td><td>2014～2022</td><td>吉田哲也</td><td>(22 期）特任連携</td></tr>
<tr><td>推薦委員</td><td>2018～2022</td><td>常田佐久</td><td>(23-26 期）連携</td></tr>
<tr><td>顕彰委員</td><td>2016～2024</td><td>新井康平</td><td>(22,24 期）特任連携</td></tr>
<tr><td>科学委員会 E 副委員長</td><td>2012～2020</td><td>河合誠之</td><td></td></tr>
<tr><td>科学小委員会 C1 委員長</td><td>2022～2026</td><td>大塚 雄一</td><td></td></tr>
<tr><td>科学小委員会 A1 委員長</td><td>2022～2026</td><td>笠井 康子</td><td></td></tr>
<tr><td>科学小委員会 F4 委員長</td><td>2022～2026</td><td>北宅 善昭</td><td></td></tr>
<tr><td>科学小委員会 C3 副委員長</td><td>2022～2026</td><td>黒田 剛史</td><td></td></tr>
<tr><td>科学気球パネル副委員長</td><td>2022～2026</td><td>福家 英之</td><td></td></tr>
<tr><td>放射線帯パネル委員長</td><td>2020～2028</td><td>三好 由純</td><td></td></tr>
<tr><td>科学小委員会 A3 委員長</td><td>2022～2026</td><td>村松加奈子</td><td></td></tr>
<tr><td>科学委員会 B 委員長、科学諮問委員、プログラム委員</td><td>2022～2026</td><td>矢野　創</td><td></td></tr>
<tr><td>科学委員会 B 副委員長</td><td>2021～2022</td><td>矢野　創</td><td></td></tr>
<tr><td>科学小委員会 B1 委員長</td><td>2014～2021</td><td>矢野　創</td><td></td></tr>
</table>

出版物	1　定期的（年 3 回）　主な出版物名 Space Research Today 2　不定期（年 10-20 回）　主な出版物名 Advances in Space Research、 Life in Space Research

４　国際学術団体に関する基礎的事項（内規第３条、４条、５条）

<table>
<tr><td rowspan="3">国内委員会（内規４条第３号）</td><td>委員会名</td><td>地球惑星科学委員会 国際連携分科会 COSPAR 小委員会</td></tr>
<tr><td>委員長名</td><td>藤本　正樹</td></tr>
<tr><td>当期の活動状況</td><td>（開催日時　主な審議事項等）
委員構成は 21 名（うち会員２名・連携会員 4 名）
2024 年１月 17 日　15:00-16:00 に第１回小委員会をオンラインで開催し、役員の選出、本年のイベント（総会等）や最近の重要事項に関する意見交換を行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内規第３（国際学術団体の要件関係）</td><td colspan="2">国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である
①　該当する　　２．該当しない
※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載
COSPAR は、国際地球観測年（IGY）での観測ロケット及び人工衛星による研究を更に協力的に進めるために 1958 年 10 月に ICSU(国際科学会議)によって創設された、「宇宙空間における科学」を推し進める国際組織である。人工衛星、深宇宙探査機、宇宙ステーション、気球等を用いた様々な種類の宇宙空間の科学研究の推進を目的として活動をしている。委員会という名称であるが、実際には ISC(ICSU) の学際組織として、隔年の科学総会や出版物を中心として、研究成果・情報・意見を交換し、国際協力を推進している。（https://cosparhq.cnes.fr/about/charter）</td></tr>
<tr><td colspan="2">各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）
①　該当する　　２．該当しない
※根拠となる資料の添付又は URL を記載
II Member の定義
主たる会員は「国家会員」と（各国の公的学術機関及び学術研究団体等）と ICSU のもとの国際科学組織である。
https://cosparhq.cnes.fr/about/national-scientific-institutions
に日本学術会議を含む国家会員のリストが載っている。
COSPAR 総会の参加者は associate として登録される。国内においても COSPAR 参加者は、天文学、地球惑星科学、物理学のみならず、工学、生命科学まで範囲は広がっており、関連する学会も 30 を越える。 COSPAR は、IAU、IUGG などの ISC(ICSU)傘下団体とも連携しており、国内においても学術会議を通した関連分野の連携が有効である。日本では学術会議以外に、この広い分野のコミュニティの意見を集約できる組織は無い。 COSPAR への加入団体として、宇宙機関が担っている国もあるが、先進８か国においては、日本の学術会議もしくは学士院に対応する組織が加入団体となっている。宇宙開発利用のなかで、科学の主体性を保ち、宇宙科学の進歩のためには、宇宙機関以外で宇宙科学を議論することができ、公式の提言等を発信できる組織がのぞましい。
（https://cosparhq.cnes.fr/about/charter）</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="4"></td><td colspan="2">下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）

ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの
(イ) 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの
ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの
エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</td></tr>
<tr><td colspan="2">10 ヵ国を超える各国代表会員が加入している
(1) 該当する　　2．該当しない</td></tr>
<tr><td rowspan="2">加入国数及び主要な各国代表会員を10 記載</td><td>（48 ヶ国）</td></tr>
<tr><td>・各国代表会員名／国名
国立科学・工学・医学アカデミー/米国、
科学アカデミー/フランス、
中国科学院国立宇宙科学センター/中国、
ドイツ研究振興協会/ドイツ、
カナダ国立学術会議/カナダ、
ラザフォードアップルトン研究所/英国、
ロシア科学アカデミー/ロシア、
インド国立科学アカデミー/インド、
王立芸術科学アカデミー/オランダ、
日本学術会議/日本、
（なお各国代表のほか、13 団体 の自然科学分野のユニオンも COSPAR のメンバーとして登録されている。）</td></tr>
</table>

（参考）
国内関係学協会（主要９団体）
日本地球惑星科学連合（日本惑星科学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、日本鉱物科学会、日本宇宙生物科学会、日本地震学会、日本地球化学会）、日本物理学会、日本天文学会、日本宇宙航空学会